

大学の図書館

第43巻第11号 (No.612)
2024 11



目次

コンテンツ収集の過去・現在・未来	吉田 弥生 ... 175
特集：コンテンツ収集の現在	
東京藝術大学附属図書館のコンテンツ収集—3つのイベントについて	大田原章雄 ... 176
酪農学園大学附属図書館における 機関リポジトリの投稿支援システムに関して	川端 幸枝 ... 178
電子ブックの選書、蔵書構築	棚次 英美 ... 182
「コンテンツ」を意味づけるもの	前田 郁子 ... 184
新たな挑戦をサポートする大学図書館研究会に	楯 幸子 ... 187
議事要録	188

コンテンツ収集の過去・現在・未来

吉田 弥生

この原稿を書いているのは10月中旬の終わり、9月の全国大会から1か月、昨年の大会で大阪に皆様をお迎えしてからは早1年、月日の経過の速さに驚きます。

我が家の庭では月下美人の鉢が今年3つ目の花を咲かせようとしています。もう20年ほど前に人からいただいたもので、うちに来てから始めは花芽がついても育たず朽ちてしまっていたのが、10年を過ぎてから初めて花開き、その後も世話の失敗による何度かの危機をはさみながらも、今ではほぼ毎年、大輪の花を咲かせてくれています。

私が大学図書館に入職したのもちょうど同じく20年ほど前。その頃図書館が収集・提供するコンテンツといえば紙の図書、視聴覚資料、雑誌、電子ジャーナルが主で、電子ブックはまだ試しに導入してみるという程度でした。タイトルも洋書が中心で、和書は流通しているタイトルが極めて少なく、まだまだこれからという時代でした。

それが今では、機関向け電子ブックのプラットフォームは国内に複数存在するようになり、和書のタイトル数も、冊子体や個人向けに比べ

るとまだまだ少ないものの格段に増えました。また、コロナ禍を機に導入を増やした大学も多いのではないかと思います。

さらには、コンテンツを外から収集して提供するだけでなく、自機関の研究者の研究成果物を、しかも論文だけでなく研究データまでも、図書館が収集し、外部に向けた発信・流通に関わることが当たり前になろうとしています。機関リポジトリの導入時には図書館が研究成果を扱うことについて学内の理解を得ることが難しい面もあったと聞きますが、今ではすっかり定着し、研究者や執行部、そして図書館以外の部署の同僚の口からも機関リポジトリの固有名が当たり前のように聞かれるようになり、感慨深いものがあります。

この20年で大学図書館におけるコンテンツの収集・提供の様相はゆっくりと、時には急激に変わりました。今号の特集ではコンテンツ収集の今を記録に留めるご寄稿をいただきました。図書館はまさに成長する有機体。10年後、20年後にどのようになっているのか、またその頃に今を振り返ってどのような感想をもたれるのか、楽しみにしたいと思います。

(よしだ・やよい／大阪大学附属図書館)

特集：コンテンツ収集の現在

大学図書館が収集・公開の対象とするコンテンツの領域は拡大と多様化を続けています。機関リポジトリや電子ブックなどデジタル化コンテンツの収集が課題になると共に、冊子体資料収集の改善も課題であり続けています。今回の特集ではコンテンツ収集を巡る業務上の工夫や、学内外との連携も含めた収集体制の構築について取り上げます。

(特集企画担当：大阪地域グループ)

東京藝術大学附属図書館のコンテンツ収集—3つのイベントについて

大田原 章雄

コンテンツ収集の話題として、ここでは、東京藝術大学附属図書館の館内選書ツアーと今年の9月に館内ラーニングコモンズで開催された2つの展示について紹介したい。

1. 館内選書ツアー

通常、選書ツアーとは、学校図書館や大学図書館等で、生徒や学生が直接書店に出向き、図書館に備え付ける本を選ぶイベントのことである。

一方、東京藝術大学附属図書館（以下、当館）の館内選書ツアーは、多くの学生（教職員を含む）が参加できるように、芸術系専門書店の協力を得て、アートブックの展示コーナーや、現代作曲家の投票コーナーを館内に設置し実施するものである。

このイベントは、学園祭（本学では「藝祭」）と同時期に館内で実施したアートブック展示（2017年度、2018年度の「Art Book Trade Fair × 古本募金」）から発展し、2019年度からはほぼ現在のスタイルになり6年目を迎えた（2021年度は2回実施しているため回数としては7回目）。

ちなみに、2024年度は「館内選書ツアー

2024～藝大生が図書館にのける本をのぶ2週間～」として開催し、概要は次の通りである。

開催場所：

図書館上野本館2Fゲート前ラウンジ

展示期間：

2024年6月10日（月）～6月21日（金）

展示冊数：約300点

協力：

flotsam books

<https://www.flotsambooks.com/>

マイブックサービス

<https://mybookservice.co.jp/>

展示内容：

- ・古典から現代までの海外のアートブック
- ・海外の写真集
- ・現代作曲家投票コーナー（※）

※図書館に楽譜をのけてほしい現代作曲家の名前を自由に書くコーナー。

名前が挙がった作曲家の楽譜で入手可能なものを購入する。

参加方法：

1. 受付で学生証、身分証を提示して投票用のシールを受け取る。
2. 展示されている資料で、図書館にのけてほしいものを選んで、キャプションにシールを貼る。
3. イベント終了後、投票点数が多かったもの

を図書館で購入する。

参加方法は、コロナ禍の時期には、オンライン投票（InstagramやWebフォーム）を併用したこともあるが、2022年度からは会場投票のみである。なお、会場の運営に当たっては、受付のためだけでなく、展示資料の盗難と破損防止のため、展示時間中は職員またはアルバイト1名が常駐し、カウンターの職員がすぐにサポートできる体制を取っている。

例年、本を熱心に見ている学生や、作曲家名が貼られたホワイトボードを前に盛り上がっている学生がいて、今年度も多数の参加者（学生159、教職員18）があり、投票数は、次の通りであった。

投票数

アートブック	505
作曲家投票	301
合計	806

展示されるアートブックには、アートについての本（作家のモノグラフ、画集、カタログ・レゾネ、展覧会カタログ等）の他、アーティスト自身が制作するアーティストブック（本という形態による美術表現）、そしてZINE等も含まれている。アーティストブックやZINE等は図書館職員としては評価が難しいところがあり、作品を制作している側の利用者に選んでもらうことにメリットがあると考えている。

作曲家投票は、「現代作曲家」が対象となっているが、クラシックかポピュラーかは問わないため、いわゆる「現代音楽」の作曲家だけでなく、大瀧詠一（シンガー・ソングライター）のような名前が挙がることもある。最先端の動向は作曲科の学生等の方が詳しいので、こちらでも利用者に選んでもらうことにメリットがあると言えるだろう。投票された作曲家の楽譜が出版されているとは限らないため、購入の対象にならないことも多いが、学

生たちの「推し作曲家」を知ること、今後の選書に活かしていくことができる。

学生に選書プロセスの一部をまかせることについては、不安のあるところかもしれないが、専門書店との事前調整により展示する本を絞っているため、予算上、投票された全点を買えないことを除けば、投票結果に困ったことはほとんどない。また、学生向けと謳ってはいるが、教職員も参加できるため、多忙な教員に会場での投票を依頼できるという利点もあり、購入の決定は学生票プラス教員票により予算内に収まるよう総合的に判断している。

当館の選書は、研究室単位の推薦、個人リクエスト等によっても行われており、これらの購入に際しては、通常の資料費から支出されているが、選書ツアーについては、その他に、古本募金による寄附や、授業料改定分の予算を充てている。本学では2019年度に授業料の値上げが実施されており、授業料改定分とは、この値上げ分を学生に還元する目的で部局に配分される予算のことで、選書ツアーはこの目的を目に見える形で示すものとなっている。

2. 展示「GEIDAI BIBLIOSCAPE 2024」

一つ目の展示は、藝祭期間中（2024年9月6日-8日）に開催されたイベント「GEIDAI BIBLIOSCAPE 2024」で、内容構成は、本学大学院映像研究科（以下、映像研究科）による企画「オブジェとしての本」「しのばず連詩林」と、附属図書館による企画「古書バザール」「蓄音機コンサート」の4本立てである¹⁾。

「オブジェとしての本」はブックアートの展覧会で、企画趣旨において「出展された各作品は、その創造力と実験精神を最大限発揮しつつ、書物の形態や機能の常識を覆した新しい視点や考え方を、広い意味でのオブジェとして表現しています。そうした革新的なア

ブローチを通じて、本というメディアの役割を再考する機会を提供します。」と説明されている。

作品のほとんどはインスタレーションで、中には会場で展示期間中に制作された作品もあった。映像研究科とは2019年にも「GEIDAI BIBLIOSCAPE 2019」を共催しているが、この時には展示終了後、期間中に制作された作品（アーティスト・コレクティブ、オル太による作品1点）を図書館資料として受け入れている。

本学には大学美術館があり、図書館は資料（主に出版物）、美術館は作品を収集するという役割分担はあるが、アートブック、アーティストブック、ブックアート（オブジェ）のどこに資料と作品の境界線を引くのか、また、「もの」としてそのまま保存することのできないインスタレーションの指示書（再現の手順、仕様や規定が記されたドキュメント）は資料なのか作品なのか等、作品を観た感想とは別に、個人的に図書館にとってコレクションとは何かを考えさせられる展示であった。

3. 展示「PLAY! 藝大ゲーム図書館計画(Lv1)」

二つ目の展示は「PLAY! 藝大ゲーム図書館計画 (Lv1)」(2024年9月26日-29日)で、東京藝大アートDXチームの主催、附属図書館の協力により開催された²⁾。

本学では、2019年4月より映像研究科の中にゲームコースを開設しているが、このゲームコースを拡充する計画がある。

開催趣旨の中では「今後開設予定のゲーム分野にしても「過去の名作に触れる」「過去の資料を閲覧する」という経験が、創作のためにも研究のためにも重要かと考えております。もちろん、最初は小さな規模・できることから始めることとなりますが、今回まずは藝大附属図書館で80年代～90年代の名作ゲームにふれて遊ぶ機会を作り、将来我々がどのような体験を提供できるかのシミュレ

ーションを、展覧会という形で実施してみることにしました。」と語られている。

この展示は、附属図書館の中にゲーム図書館が開設されたことのお披露目ではなく、将来的に図書館においてゲーム資料を提供するとして、どのような形であれば可能なかを模索するための試みである。ゲームについての文献を図書館資料として扱うことは不自然ではないが、体験を提供するには、ゲームのメディアとゲーム機を「資料」として扱う必要がある。そのために、展示とプレイを両立させる什器も試作されている³⁾。展示が終わったばかりであり、Level2 (Lv2) がどうなるのかは現在のところ未定である。

以上、館内選書ツアーの紹介を中心に、2つの展示を通して、コレクションの概念や対象の再検討等についても触れてみた。当館の試みが参考になれば幸いである。

1 <https://fm.geidai.ac.jp/biblioscape/2024/> (2024-09-30参照)

2 <https://artdx.geidai.ac.jp/information/859> (2024-09-30参照)

3 <https://note.com/hachiya/n/n07de72069e62> (2024-09-30参照)

(おおたはら・あきお／

東京藝術大学附属図書館)

酪農学園大学附属図書館における 機関リポジトリの投稿支援システム に関して

川端 幸枝

1. はじめに

1-1 機関リポジトリへの登録が求められる要因

現在、大学図書館において機関リポジトリ

への登録が求められている。機関リポジトリについて文部科学省は次のように定めている。

大学等の生み出す多様な知的生産物は、第4期科学技術基本計画において形成が謳われている「知識インフラ」を構成する中核的要素であり、我が国の貴重な財産として、社会に共有され、活用されることが、今後の発展のために必要である。

研究成果のオープンアクセス化への対応を含め、こうした知的情報の蓄積・発信は、社会への貢献が求められる大学等の責務であり、そのための重要な手段として機関リポジトリを位置づけ、整備・充実を図ることが望まれる。このことは、文部科学省が策定した「大学改革実行プラン(平成24年6月)」における「大学ポートレート」と同様に、大学の教育研究に関する積極的な情報発信を促すことを目的とするものである。¹

大学・大学院において産出される知的生産物は広く社会に共有・還元することが求められる。それは大学・大学院に対し公費助成が多くなされていることから要請される内容である。知的生産物を整理・公開していくことは「知識インフラ」となるだけではなく、大学・大学院の研究力を外部に示す宣伝ツールにもなりうる。

具体的な機関リポジトリの役割にはこの「知識インフラ」の環境整備に当たる3点が求められている。

1. 大学の生産する知的情報・資料の集積、長期保存の場（アーカイブ）
2. 学術情報の発信及び流通の基盤（論文、データ、報告書等の公表及び提供）
3. 学習・教育のための基盤（教材の電子化、

提供、保存)²

現在、機関リポジトリは国立情報学研究所が主導する形で各大学での構築が進められている。中でも大学紀要と博士論文は機関リポジトリに登録することが求められている。

1-2 問題の所在

このように機関リポジトリへの登録・公開は社会的に求められている。しかしながら登録を行う場合、個々の教職員のマンパワーを必要とするという欠点がある。そのため、せっかくの知的生産物が日々の多忙さから機関リポジトリに登録されずに放置されているケースも多いことが想像される。

1-3 大学附属図書館の役割

機関リポジトリ登録において重要な役割を果たすのが大学図書館である。従来、大学図書館は教員の研究資料などを紙ベースで管理することが求められていた。現在はそれに加え、機関リポジトリを始めとする電子情報登録やデータベース管理が求められるようになっている。

本稿においては筆者が勤務する酪農学園大学附属図書館の事例を元に、機関リポジトリ登録における大学図書館のあり方を検討していく。

2. 酪農学園大学附属図書館の事例

2-1 酪農学園大学附属図書館の概要

酪農学園大学（以下 本学と表記）は北海道江別市にある私立大学である。本学は1933（昭和8）年に北海道酪農義塾として創立された。その後、酪農学園大学部、酪農学園短期大学、酪農学園大学と変遷してきている。農食環境学群（循環農学類・食と健康学類・環境共生学類）と獣医学群（獣医学類・獣医保健看護学類）から構成されており、学生数は約3,000人となっている。附属図書館

には約31万冊の蔵書があり、酪農・食品・環境・獣医学などの資料が数多い。獣医教育の点で全国的にも注目されるだけでなく、農業・酪農分野での深い専門性を誇っている。

本学附属図書館は大学の特性上、農業・獣医学関係の専門図書を多く所蔵し、近隣の農業従事者からの利用も多い特徴がある。

2-2 酪農学園大学附属図書館における機関リポジトリの導入

2-2-1 CLOVER 命名の理由

本学の機関リポジトリは酪農学園大学学術研究コレクションCLOVERという名称で運営されている (<https://rakuno.repo.nii.ac.jp/>)。この名称は本学が酪農学園大学であることから牛が連想され、その牛からの連想で代表的な牧草名を取ってCLOVERと命名されている。図1はCLOVERのトップページである。

2-2-2 CLOVERのサーバ管理に関して

本学附属図書館は2010年に機関リポジトリの学外公開を行った。これは北海道内の私立大学としては早期からの運用になる。

CLOVERの学内サーバはDSpaceというシステムを使い、学内に物理的サーバが設置されていた。稼働当初は問題なかったものの、

2010年から稼働して既に7年が経過し、ハードウェアの保守や更新が必要となっていた。また、物理的サーバのため災害などの際にデータが失われるリスクもあった。

そのため2017年10月10日にJAIRO Cloud³という共用リポジトリへ変更を行うこととなった。

2-2-3 登録件数を増やすための取り組み

CLOVER発足初期は過去の学内紀要の原稿を裁断・スキャンし、登録を行っていた。実際、CLOVER始動前の2009年度、大学院研究科および附属図書館で所持している本学紀要・論集類のPDFファイル約350ファイルを登録し、紀要・論集の電子化・公開化が進められたほか、機関リポジトリに関連するガイドラインや著作権処理方法の検討が進められた。

しかしながらCLOVER始動の際、教員への登録を要請するところから始めると登録件数が増えないことも予想されていた。また、附属図書館職員が入力するにしても手間と人がかかることも想定されていた。

そのため本学ではCLOVER公開時より外部委託の業者による機関リポジトリ登録を行うこととした。これは外部委託先に入力を依頼して機関リポジトリに登録を行ってもらう



図1 酪農学園大学学術研究コレクションCLOVER

だけでなく本学教員のresearchmapと連動し、researchmapに掲載されている情報をもとに登録する形となっている。その際には著作権処理の対応も依頼するようにしている。⁴

本学では全教員がresearchmapのアカウントに登録しており、この業績入力に基づき、個人研究費の傾斜配分額が決まるため、入力拒否をする教職員はゼロである。

現在は学内紀要および博士論文およびresearchmapに公開されている文献情報のうち許諾が得られたものについてCLOVERに登録・公開をしている。過去の論文に関しても著者の承諾が得られたものは公開しているが、承諾が得られず非公開となっている論文も存在している。

2-2-4 researchmapの自動登録機能による登録件数の増加

researchmapは2020年2月から本人以外（AI、共著者、代理人）による業績の自動登録機能を実装している。これはAIがネット上を探り、その著者の論文であると推定される論文を見つけた際自動でresearchmapに登録されるサービスである。なお、researchmapの設定によっては自動で登録させないようにすることも可能である。⁵

この自動登録機能も相まって、近年における本学の業績データ数は2021年から増加傾向にある。その登録件数を示したものが表1である。

表1 CLOVERの登録状況

年	業績数	前年比
2018	680	-
2019	420	- 260
2020	389	- 31
2021	470	+ 81
2022	604	+ 134
2023	773	+ 169

さて、ここまで外部委託による機関リポジトリ登録について見てきたが、論文を投稿した学会や出版社によっては外部委託ではなく本学附属図書館の作業でなければ公開できないという要望が届くケースがある。その場合は外部委託ではなく附属図書館職員で作業を担当している。

3. 機関リポジトリ登録の外部委託とその成果

本学附属図書館では機関リポジトリへの登録作業を外部業者に委託して実施している。その成果を以下2点に分けて述べる。

メリット1 人手を割くことなく登録が可能になった

外部委託により機関リポジトリ登録に附属図書館職員の人手を割くことなく対応できるようになった。またresearchmapへの登録を附属図書館から教員に呼びかけることで、教員の負担も減らしての登録が可能となった。

現在、本学附属図書館の職員数は常勤・非常勤ともに削減が進んでいる。その中において着実に登録を行えるところに機関リポジトリ登録の外部委託の意義があるように思われる。

メリット2 機関リポジトリ・researchmap登録件数が飛躍的に増加した

外部委託をすることで機関リポジトリ・researchmapの登録件数が飛躍的に増大することになった。その結果、研究成果の参照件数も増えるようになった。

4. 結論と今後への展望

外部委託化により酪農学園大学は機関リポジトリのスムーズな登録を行えるようになった。その結果、周囲からも「酪農学園大学は機関リポジトリが充実している」と言われるようになってきた。

現在、国立情報学研究所により、研究業績のオープンアクセス化と機関リポジトリとを連携するプロジェクトが進んでいる。機関リ

ポジトリ CLOVERは本学教員の成果を世界に発信していくうえでも重要な役割を担っている。また機関リポジトリだけでなく研究業績をオープンアクセス化することは他大学の研究機関による文献参照数や引用数を増やすことにもつながっていく。

実際、政府においても「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針」が定められるなど、オープンアクセス化と機関リポジトリ登録の実施が呼びかけられている。⁶

こういった機関リポジトリ管理を担う大学図書館は単なる資料管理者ではなく大学の研究成果を広める広報担当者でもある。したがってこの点で大学図書館の意義は今後より大きくなっていくのではないだろうか。

注・引用文献

1) 文部科学省. 2012. 「機関リポジトリの活用による情報発信機能の強化について https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/002-1/siryo/attach/1323931.htm (参照 2024-09-24)

2) *ibid.*

3) JAIRO Cloudとは「国立情報学研究所が大学等に機関リポジトリ環境提供を行うクラウドサービス」(前田朗. 2015. 「JAIRO Cloudに参加するには」 https://www.nii.ac.jp/userimg/libraryfair2015/2015_LFF_2_1.pdf) (参照 2024-09-24) を意味する。

4) 廣田政則. 2020. 「酪農学園大学 学術研究コレクションCLOVERの事例報告」『図書館総合展JPCOARフォーラム』 https://rakuno.repo.nii.ac.jp/record/6592/files/LibraryFair2020_6.pdf (参照 2024-09-24)

5) reserchmapサイト. 「AIによる業績情報の自動登録・更新機能」 <https://researchmap.jp/public/about/ai> (参照 2024-09-24)

6) 統合イノベーション戦略推進会議. 2024. 「学術論文等の即時オープンアクセスの実現

に向けた基本方針」 https://www8.cao.go.jp/cstp/oa_240216.pdf (参照 2024-09-24)

(かわばた・ゆきえ／

酪農学園大学附属図書館)

電子ブックの選書、蔵書構築

棚次 英美

1. はじめに

現在の大学図書館において、電子ブック・電子ジャーナル・データベース・機関リポジトリを中心に電子コンテンツの提供が進んでいる。その中でも電子ブックは2020年の新型コロナウイルス感染症による影響下で物理的な図書館利用が制限されるなか、来館せずに利用できる利点がクローズアップされ、一気に導入が進んだとされている¹⁾。

文部科学省の学術基盤実態調査の令和5年度²⁾ から算出すると、大学図書館における電子ブックの導入率は69%となっており、約7割の大学図書館で導入されていることがわかる。その数字から電子ブックの提供が大学における図書館サービスとして普及していると捉えることができるだろう。

「進化した図書館サービスにおいては、電子化された資料が占める比率によって提供できるサービスのレベルに大きな差が生じる」³⁾ とあるように、電子ブックには全文検索機能をはじめとした検索のしやすさ、場所を選ばず利用できること等、図書館・利用者双方へのメリットがあり、電子ブックのタイトル数が増え、図書館資料におけるウエイトが増えれば、利用者サービスの向上につながるといえる。

ただ一方で、電子ブックは新刊が発売されても反映されにくい、教科書等のシラバス掲載図書は電子ブックとして販売されることが少ない、貸出の多い冊子体が図書館向け電子

ブックとして商品化されていない等、電子ブック特有の事情もある。

本稿では勤務先(千里金蘭大学付属図書館、以下当館)における電子ブックの導入の経緯や利用状況などをもとに、当館の電子ブックの選書・蔵書構築について報告する。

2. 導入の経緯

当館の電子ブックの契約は2016年に始まり、現在に至る。電子ブックの当初の導入目的は館内備品のタブレット端末の活用促進が目的で、利用者がタブレット端末を電子ブックリーダーとして使用しながら、PCでレポート作成ができればと実験的に導入を行った。

導入当初は契約タイトル数自体少なかったこともあり、電子ブックのアクセス数は年間100回にも満たず、タブレットと共にあまり利用されない状態が続いた。その後、徐々に契約タイトル数を増やしたことに伴い、利用も増え(コロナ禍による入構制限時の一時的なアクセス増を除き)年間のアクセス数は4000回前後で推移している。

3. 購読形態

当館では電子ブックは丸善雄松堂のMaruzen eBook Library(以下、MeL)で購入している。購入代理店を1つにすることで管理・運用がしやすいこと、プラットフォームを1つにすることで、さまざまなプラットフォームを行き来することなく、1つの画面から電子ブックを利用できるようにしている。

MeLの購読形態は「買い切り」と「サブスクリプション」があるが、すべて「買い切り」で購入している。同時アクセス数は1か3を選択できるが、利用者への案内のしやすさから、全て同時アクセス数3で統一して購入している。

購入した全ての電子ブックは図書館システムで登録・管理しており、MeLのプラット

フォーム、OPACのどちらからでも検索ができるようにしている。

4. 選書

選書は冊子体の基準に基づいて行っているが、加えてダウンロードが可能であること、貸出利用が多い冊子体と同じタイトルであること、レファレンスでよく聞かれるキーワードが掲載されているものを中心にMeLの電子ブックの中から選定し、購入対象としている。

当館の電子ブック利用の特徴として、電子ブックだから利用するのではなく、調べたいことが載っている冊子体が電子ブックになっているので利用するという使い方が多い。

そのため、電子ブックの選書は電子ブックの利用統計よりも冊子体の貸出利用統計を参考にすることが多い。

選書にあたって、利用者からの購入リクエストを参考にしている図書館は多いと思われるが、当館では電子ブックの購入リクエストを受けることはほとんどない。利用者ニーズの調査を兼ね、試読サービスとリクエスト募集を同時に行ったこともあったが、リクエスト数はあまり集まらなかった。実習や課題等で常に忙しい利用者が多い本学では、試読に興味をもってもらうこと、数万点もの電子ブックのタイトルの中から欲しいものを選んでもらうことの難しさを実感した。

5. 蔵書構築

蔵書を構築する上で新しい資料をどう収集していくかは図書館の課題であり、電子ブックの収集は図書館の重要な役割だと考えられるが、当館の圖書の収集は現在のところ、まだ冊子体が中心である。

理由は2つあり、まず1つは貸出が多い冊子体が図書館向け電子ブックとして販売されていないことが挙げられる。コロナ禍以降、電子ブックの販売点数は増えたが、依然とし

て「この本は電子ブックになってないんですか?」と聞かれることが多い。様々な事情があって電子ブックとして販売されていないと思われるが、貸出利用の多い本が、どのサービス事業者からも図書館向けの電子ブックとして提供されていないことをもどかしく感じることも多い。

もう1つの理由として、MeLに関していえば、ダウンロード方法が2段階認証方式に変わり、煩雑になったことが挙げられる。MeLのダウンロード機能は電子ブックの中から必要なところだけをダウンロードできるので重宝されていた。そのため、学外実習前後の時期には電子ブックの案内も積極的に行うようにしていたが、2段階認証方式に変わってからは、案内時に時間と手間がかかるようになり、冊子体の方が使いやすく案内もしやすいという状況になっている。利用者に電子ブックを紹介しても、(電子ブックが)あるのは知っているが、やはり冊子体の方が使いやすいのでと、冊子体に予約が入ることも多い。上述の理由によって、当館では現在まだ冊子体中心の収集となっている。

6. おわりに

電子ブックをはじめとした電子コンテンツはサービス提供元の方針等により、突如変更が行われることも多い。新規機能追加などのポジティブな変更がほとんどだが、(事情があつての措置で仕方のないことだと思うが)、突然ダウンロード不可となったり、ダウンロードができるようになっても認証が必要となる等の変更が実施される可能性もある。「買い切り」であっても、何らかの理由で電子ブックの提供方式が変わることは考えておかねばならないと感じている。(個人的には利用者の利便性を妨げないように考慮いただけるとありがたいと思う)

とはいえ、やはり電子ブックには利点も多く、その利点を生かした蔵書構築をと思うが、

自分自身の不勉強もあり課題も多い。積極的な取組みを行っている大図研の活動事例報告等を参考に、より便利で使いやすい蔵書構築を目指していきたい。

参考文献

- 1) 日置将之:《座標》コロナ禍における電子書籍の導入について, 図書館界, 72(4): 171, 2020
- 2) 文部科学省, 学術情報実態調査結果報告書 令和5年度, 大学図書館編 10, 電子図書館的機能(2022年度) URL: https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat_infid=000040156904 (参照 2024/10/11)
- 3) 植村八潮, 野口武悟, 長谷川智信編著. 電子図書館・電子図書館サービス調査報告 2022: これまでの10年とこれからの10年, p.51

(たなつぐ・えみ/千里金蘭大学附属図書館)

「コンテンツ」を意味づけるもの

前田 郁子

今号はコンテンツ収集、というお題をいただいたのですが、すでに図書館を退職している身でコンテンツ収集の実務について書くことはできませんでした。そこで、現在選考委員を務めさせていただいている、知的資源イニシアティブ(IRI)の「Library of the Year」¹⁾を切り口に、「コンテンツ」と収集について考えてみたいと思います。

Library of the Year(以下、LoY)は、「良い図書館を良いと言う」を理念に、「これからの図書館のあり方を示唆するような先進的な活動を行っている機関に対して」年1回授与される賞で、2006年から現在まで続いています。昨年には「東京学芸大学附属図書館とExplayground推進機構MOL」が優秀賞を、

2022年には「千葉大学アカデミック・リンク・センター／附属図書館」がライブラリアンシップ賞を受賞されたことも記憶に新しいと思います。このように対象はいわゆる公共図書館に限らず、様々な館種と「図書館活動」です。

あらかじめ決められた指標に基づいて図書館を評価するものではなく、「良い図書館を良いと言う」に示される「良い」とは何か、「良い図書館」とはどういうことか、を、様々な選考委員や一般の推薦者が、様々な角度から持ち寄って検証することに趣旨を置いています。これはLoYの大きな特徴です(そのため、受賞館に対して「日本一の図書館」という表現は用いていません)。

歴代の受賞者とその理由を見ると²⁾、そのような「良い」の中に、コンテンツは「埋め込まれている」ことが多いようにも見えます。コンテンツ構築は大前提や基本とされ、それらの上に成立するコミュニティ活動や連携が注目されることも多々あります。すなわち「コンテンツ」は、触れるまでもなく「図書館活動」の根底にある、とも言えるでしょう。一方でまた、活動によって「コンテンツ」が積みあがってゆき、それらをもとにさらなる活動に発展する、という場合もあります。

そんなコンテンツの観点から紹介する今年の受賞者は「みなサーチ(国立国会図書館障害者用資料検索)とデータ提供館並びにデータ制作者の方々」と「つくるを支える 届けるを贈る『がん情報ギフト』プロジェクト」です。これらはコンテンツに比較的目標が向けられている活動ではないかと感じました。

「みなサーチ」³⁾の受賞対象には、国立国会図書館と、長年音訳・点訳資料を制作・収集してきた各地域の図書館や点字図書館の活動が含まれています。

これらの資料群は、「視覚に障害を持つ方が利用する」という目的を持つコンテンツとして、それぞれの館において制作・収集・管

理が行われてきました。それが、時代とともに、また法律の改正によってメディアの種類が増え、利用対象者も増え、国立国会図書館によるテキストデータも加わって、ここに「みなサーチ」という単一のプラットフォームから一括で検索・提供可能となりました。当初は単館によりそれぞれの館の利用者のために継続的に構築されてきたコンテンツが、館種を超え、より大きなコレクションとして可視化され、視覚障害の当事者等以外にも広く認知されうるようになったといえます。

「がん情報ギフト」⁴⁾は、国立がん研究センターによるプロジェクトです。がんについてわかりやすく信頼のおける情報を紙資料としてパッケージ化し、全国の公共図書館に寄贈する活動です。資料の定期的な更新、寄贈後の図書館への継続的なサポートも行っています。

がん情報を必要としているより多くの人に届けるためには、ウェブ上に情報を掲載するだけではなく、紙で、しかもたくさんの人の目につくところに設置することが必要であり、公共図書館が窓口として適任ということになりました。また公共図書館側でも、「がん情報ギフト」の資料群が健康・医療情報サービスの中で有効な役割を果たすと考えられているようです⁵⁾。専門的でかつアップデートが必要な資料を、個々の公共図書館でフォローしていくことは困難を伴いますが、「がん情報ギフト」はそこを補います。

また、「がん情報ギフト」の資料群をきっかけに、自館の健康・医療情報サービスを(再)構成することもあるかもしれません。プロジェクトでは2021年度よりさらに踏み込んで、「がん情報ギフト『結ぶ』事業」⁶⁾を行っています。寄贈を受けた館が、より「がん情報普及拠点」であることを自覚し、発信、行動するための事業です。

コンテンツ収集って地味で泥臭く手がかか

る作業だと思います。対象が紙や物理的なものであれば破損や劣化を気にしなければならないし、機関（大学）の資産とするかどうか、あるいは資産であればどう除却するか、決めなければいけないし、デジタルもこのさき再生できなくなる可能性もあるし、収集すればするほど容量は必要だし、メタデータは記述方法があるし互換性もいるし、PID（永続的識別子）の付与とその単位、利用時の著作権もポリシーもこちらがたてておく必要があるかも。

いったんコンテンツを収集し、メタデータをつけて発信したら、こちらの思惑を超えたところで発見され捕捉され、利用される。そのとき、どこのだれか分からない人がみても、このコンテンツの素性が、利用の仕方がわかりやすいか。学術情報として引用しやすいか。おそらく収集のプロセスにはそういったところへの想像力が必要、あるいは作業の助けになるでしょう。無数の情報が存在する中で、利用側もどのような形でやってくるかわかりません。それでも、出自と意図を明確にして収集したものを整理・発信することはできるし、結局それしかできないのです。そしてその泥臭い仕事を行って、初めて「コンテンツ」としての意味が明確になってくるのだらうと思います。

- 1) 知識資源イニシアティブ (IRI). "Library of the Year". <https://www.iri-net.org/loy/>, (accessed 2024-10-10).
- 2) Wikipedia. "Library of the Year" 受賞機関の項. https://ja.wikipedia.org/wiki/Library_of_the_Year, (accessed 2024-10-10).
- 3) 国立国会図書館. "みなサーチ (国立国会図書館障害者用資料検索)". <https://mina.ndl.go.jp/>, (accessed 2024-10-10).
- 4) 国立がん研究センター. "つくるを支える届けるを贈る『がん情報ギフト』プロジェクト". <https://www.ncc.go.jp/jp/d004/dona>

tion/ganjoho_gift/index.html, (accessed 2024-10-10).

- 5) 八巻知香子, 金沢賢悟, 岡本裕樹, 三村麻子, 多田麻衣子, 若尾文彦. "「がん情報ギフト」の効果と今後の力点". 第39回医学情報サービス研究大会プログラム. 名古屋, 2024-7-13/14, 医学情報サービス研究大会. <https://plaza.umin.ac.jp/mis/39/program.html>, (accessed 2024-10-10).

6) 国立がん研究センター. "がん情報ギフト「結ぶ」事業". https://www.ncc.go.jp/jp/d004/donation/ganjoho_gift/20220708171351.html, (accessed 2024-10-10).

(まえだ・いくこ)

大阪大学全学教育推進機構)

新たな挑戦をサポートする 大学図書館研究会に

楫 幸子

1. はじめに

このたび、第55期より大学図書館研究会の会長に就任いたしました楫幸子です。会員の皆さまには日頃より、当会の活動にご支援とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

2. 入会のきっかけ

改めて確認してみると、私が大図研に入会したのは1998年7月のことでした。最初の職場がドイツのマールブルク大学日本研究センター図書館でしたので、図書館の業務に慣れるよりもまずドイツ語と悪戦苦闘していた時期です。

当時、日本資料図書館連絡会の会合で面識のあったケルン日本文化会館の蓮沼龍子さんに誘っていただいたのが、大図研に参加した直接のきっかけです。

それまで図書館勤務の経験はなく、学生アルバイトはいましたが大学図書館の分館でひとり勤務している状態でした。センター内では日本語中心だったことと主に和書の目録登録に携わっていたため、マールブルク大学の大学図書館については断片的にしか情報が入りませんでした。自分の勉強不足ですが言葉の壁は大きかったです。

入会の誘いは大変有難く、大学図書館の業務や新しい動きについてなど、日本語で知識を得られる大図研の会報にはずいぶん助けられました。

入会を決めたもうひとつの要因として、大学時代のゼミで指導を受けた山本順一先生の影響があります。ゼミの講座名すら忘れてしまったのですが、専門職というなら職能団体に入り論文を書きなさいと、文言は正確では

ありませんがそのように言われたことを記憶しています。その刷り込みがあったため、大図研を紹介されたときにすぐに入会するべきだと思ったようです。

指導を受けた教員からの言葉は案外心に残ります。会員の皆さまもぜひ、教員として先輩司書として、研究会の重要性を吹き込んでもらえたらと思います。

3. 大図研での活動

帰国してからすぐは事務の派遣社員として働いていましたが、2005年から安田女子大学図書館に司書として派遣されることになりました。その後パート職員を経て、現在専門職員として勤務しています。

大図研では、以前の広島支部、今の広島地域グループにお世話になりました。派遣社員やパート職員では研修の機会が限られたのですが、研究会に参加して編集委員を担当することで、広島県内の大学図書館員との交流にも役立ちました。

その後参加した学術基盤整備研究グループでも、先進的な活動をおこなっている参加者から多くの学びを得ています。

それらの活動のなかでも2017年から就任した全国委員での経験が、より本業の実務に生かせていると感じます。

委員会では議事進行や資料の作成方法、新しいコミュニケーションツールの活用方法など、様々なことを体験できました。

全国大会の分科会の企画運営では反省点も多いのですが、自館の悩みを解消する機会でもありました。NDC10版への移行をテーマにしたことで、講演や事例発表の後押しもあり勤務先でもNDC9版からの切り替えを進めることができました。

また、この全国委員会では吞海前会長と接する機会を得て、リーダーシップを持って会の名称変更や出版物のデジタル化など、大図

研を改革されていく姿に感銘を受けました。常に「大図研は失敗ができる場だから」と、新しい試みに挑戦できる場を提供してくださいました。

4. おわりに

大学図書館の業務に必要な知識や技能は常に変化していますが、それらの情報を得て学び続けるために、大図研は私にとって大きな助けとなりました。同時に多くの会員との交流を通じて、新しい視点や新しい世界を知ることができました。機関を超えて業務について話せる関係は貴重です。

大図研への参加が、自身のキャリアアップにもつながったと実感しています。

これからもこの大図研のよさを、これまでの会長や会員の皆さまが築き上げられてきた基盤を大切にしつつ、さらに研究活動や会員同士の交流を進めていければと思っています。誰もが失敗を恐れず、イベントの企画や役職の経験、全国大会の運営などに挑戦できる場にしていきたいと考えています。

当然、私一人でも常任委員や全国委員だけでも実現できないため、会員の皆さまのご協力をいただきながら大図研で共に学び成長していければと思います。

新しいことに挑戦してみたい方は、ぜひ企画や運営側も経験してみてください。試行錯誤をしながら一緒に活動していくことを楽しみにしています。

どうぞよろしくお願いいたします。

(かじ・さちこ／安田女子大学図書館)

議事要録

2024/2025年度 第1回全国委員会

日時：2024年9月21日（土）10:40-10:55

場所：Zoom

出席者（敬称略）：

中筋（北海道地域グループ）、加藤（千葉地域グループ）、下山（東京地域グループ）、中川（東海地域グループ）、長坂（京都地域グループ）、諏訪（広島地域グループ）、柿原（九州地域グループ）、楢（学術基盤整備研究グループ）（以上、グループ推薦全国委員）、呑海、赤澤、上村、有馬、和知（以上、常任委員）、青山、磯本、澤木、松原、渡邊（以上、常任（特定）委員）

2024/2025年度 第1回常任委員会

日時：2024年10月20日（日）13:30-15:15

場所：Zoom

出席者（敬称略）：

楢、赤澤、上村、和知（以上、常任委員）、青山、澤木、松原、渡邊（以上、常任（特定）委員）

◆議事の詳細は以下からご覧ください。

<https://www.daitoken.com/committee/>

大学図書館研究会出版部住所変更のお知らせ

大学図書館研究会出版部の住所が、2024年11月1日付で以下のように変わりました。
会報『大学の図書館』の発送、購読料ご請求及びこれらに係るお問合せは、以下の新住所にお願い申し上げます

ご不明な点がございましたら、出版部までメールにてお問合せをお願いいたします。

なお、当会出版部は電話・faxとも設置しておりません。

また、事務局の住所等の変更はございません。

	現住所	新住所
郵便番号	305-0033	305-0042
住所	茨城県つくば市東新井10-1-111 マザータンク気付	茨城県つくば市下広岡410-7 マザータンク気付
メールアドレス	shuppan@daitoken.com	[変更ありません]

大学の図書館 第43巻第11号 (No.612) 2024年11月25日 (毎月25日発行) ISSN: 0286-6854
編集・発行: 大学図書館研究会 年間予約購読料: 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒305-0042 茨城県つくば市下広岡410-7 マザータンク気付

E-mail: shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> 三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座: 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F

E-mail: dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00190-2-79769 大学図書館研究会

2024/2025年度 運営サポート会員を募集します

会務をサポートする運営サポート会員を募集いたします。通常の会務を担当するために、会則により常任委員会が組織されておりますが、常任委員の人数も漸減傾向にあり、会員の有志のご協力をお願いしたいと考えております。

今回募集するのは、以下の委員会です。

- | | | | |
|-------------|----------|----------|--------|
| ・研究企画委員会 | ・会報編集委員会 | ・会誌編集委員会 | ・広報委員会 |
| ・記念出版物編集委員会 | ・事務局出版担当 | ・事務局組織担当 | |

業務の内容は、お問合せくださった方に、常任委員の担当からご連絡いたします。

我こそは、と思う会員各位、お問合せ先までご連絡をお願い申し上げます。

なお、諸般の事情で、お申し出に添えない場合もございますので、ご了承ください。

【問い合わせ先】

大学図書館研究会事務局 dtk_office@daitoken.com